

説教題 「共に苦しむ神」

聖書箇所 マタイによる福音書9章9節—13節

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがその家で食事をしておられた時のことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人人はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

人が落ちぶれた時、その人はそこにおるかとも言ってもらえなくなります。あれほどちやほやした人々が、近付かなくなります。イエス・キリストは、そんな時の、その人の唯一の友なるお方です。それは本日の箇所を読めばよく分かります。収税所に座っていた徴税人マタイは、ファリサイ派の人々に「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言われた「(あんな)徴税人や罪人」呼ばわりされる最たる人物

です。こんな者と食事を共にする人間など、当時、普通はいなかったのです。何故でしょうか。巻き添えを食うからです。私は老人ホームに時々行きますが、そこにはあまり人々に寄り付いてもらえなくなった人々が多くおられます。同じような年齢の人でも、世の中では企業のトップとか政治の中心などで活躍しているような人々は、下にも置かない扱いを受けています。そして、ふと気付くと、私自身、そのような人々をちやほやしがちです。そのように、ちやほやしたりされたりしている連中は、イエス・キリストが本日の箇所で仰っている「丈夫な人」です。そして、イエス・キリストは「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」と仰り、また「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」という神様の言葉を引用なさいます。

イエス・キリストは、この社会において丈夫でない人、健康でない人のところに行かれます。これは、勿論いわゆる病人を指す言葉ではありません。ここでいう病人とは、社会的に不都合な目にあわせられている人のことでしょう。徴税人や罪人は彼等の責任でそうなったのではありません。一所懸命に生きているうちに、そのような境遇に置かれたのです。何故そうなったのかをいくら詮索しても、それは不毛なことです。それは、ヨハネによる福音書9章で目の不自由な人を見かけた弟子たちが「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」とイエス・キリストに質問した時のイエス・キリストのお答えからも明らかです。イエス・キリストは「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」とお答えになりました。あの言葉こそ、本日の箇所の「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」とい

う旧約聖書の言葉に通じます。百の詮索よりも、一つの愛の業が必要です。

イエス・キリストは丈夫な者に医者には要らないと仰いました。徴税人や罪人にこそ医者が必要だと仰るのです。ではイエス・キリストというお医者さんの治療法はどのようなものでしょうか。それは、ただ「一緒に食事をする」ということだけでした。共に座り、ご飯を食べることそのものが癒しの業でした。あなたが誰とご飯を食べるかで、あなたという人物が分かります。それは、あなたは誰の友ですかと問うのと同じです。一緒にご飯を食べるということは、一緒に食べる人の仲間になって、その人の背負っているものを一緒に背負うということになりかねないことです。ですから、私たちは一緒に飯を食うに足る人として、飯を食いません。食事に招かれても、相手が気に入らない人なら体よく断ったりいたします。その意味で、イエス・キリストが罪人や徴税人と食事を共にされたのは、著しいことであり、正にこの事実そのものが福音です。

あなたや私が丈夫な者であるなら、医者なるイエス・キリストはあなたや私と共に食事の席についてくださいません。ここで言う病人とは、この世で苦しんでいる人のことです。「徴税人や罪人」と呼ばれていた人々は、当時苦しんでいたのです。イエス・キリストが彼等の食事の席につかれたというのは、ただ腹を満たしたり、食事に舌鼓をうったりしたのとはわけが違います。彼等と食事を共にするとは彼等と苦しみを共にするということでした。イエス・キリストはそのように共に苦しんでくださる神でした。

さて、様々の側面で、現代のこの世の中で痛み苦しんでいる私たちは、この場の徴税人や罪人と同じだと言えます。もしあなたが苦しんでいなければ、あなたほど不幸な人はいません。何故なら、苦しんでいないようなあなたとイエス・キリストは食事の席に共に座ってくださらないからです。

この世の中で調子よくいっている人々、あるいは有名な人々と食事をして喜んでいるあなたが、もしクリスチャンだと自称したとしても、あなたはクリスチャンではありません。その時あなたは、この世の王に仕える、クリスチャンもどきです。反対に、そこにおるかとも言ってもらえず、世間の人々から見捨てられたようなあなた、あなたとこそイエス・キリストは食事を共にしていただきます。あなたの貧しい食卓に、イエス・キリストは今日も共に座っていただきます。さて、この礼拝に集っている私たちの中に、イエス・キリストを今晚の食卓にお迎えできる人が何人いるでしょうか。そして、どんなに豪華な料理が並んでいても、イエス・キリストと一緒に席についてくださらない食事の席の何と味気ないことでしょうか。

ここで、淵上毛銭という人の詩を読ませていただきます。毛銭は1915年(大正4年)水俣の生まれで、1950年(昭和25年)にカリエスで死にました。今日お読みしたいのは「もう題なんかいらぬ」という詩です。

「俺は／俺といつしよに／死んでくれる神があるとは／思はない／俺は／俺ひとりで／死ぬだけでも／一苦労なんだ」(前山光則編、『淵上毛銭詩集』石風社、1999年刊より)

この詩を読むと、如何に淵上毛銭が、一緒に死んでくれる神様を切実に求めていたかが胸に迫ってまいります。毛銭の言う「いつしよに／死んでくれる神」が、私はあると確信いたします。それは、ほかでもない、イエス・キリストです。「徴税人や罪人」の苦しみに代表される現代の私たちの悩み苦しみを担ってくださり、私たちと共に食事を共にしてくださるイエス・キリストという神様こそ、「一緒に死んでくださる」神様です。イエス・キリストはちょっと大学に合格させてくださる程度のちよろこい神様ではありません。日々のた打ち回りつつ生き死にしている私たちと共に、生き死にしてくださる共に苦しんでくださる神様です。また、この神様こそ、あの

『夜』というホロコーストを描いた作品の中でユダヤ人作家エリ・ヴィーゼルが描き出した神様でもあります。すなわち、ナチの収容所を爆破したということで若い少年が縛り首にされたのを見た誰かが「神さまはどこだ、どこにおられるのだ」とつぶやいたのを聞いた時、エリ・ヴィーゼルは心の中で「どこだって。ここにおられる—ここに、この絞首台に吊るされておられる」と叫ぶ声を聞いたというのです。本日の箇所、徴税人や罪人と食事を共にされたイエス・キリストはナチスに理不尽にも殺されていった少年と共に絞首台に吊るされてくださる、共に苦しむ神様です。この「共に苦しむ神」なるイエス・キリストを、毎日、心していただきましょう。お祈りいたします。

祈り神様、私たちに、自分が如何に罪人や徴税人であり、病人であるかを思い知らせてください。そしてその自覚の極みで、私たちと共に苦しんでくださることによって私たちを癒してください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン。